

〔個人研究〕

ハイデルベルクのヴァレザーと友松円諦

西村 実 則

渡辺海旭が留学中のシュトラースブルクとヴァレザーのいるケールの距離は、渡辺によると徒歩で三十分であった。縮刷蔵経と観音を置いた渡辺の部屋で二人はナーガールジュナの『中論』を論じ合うほど、いたって親しき間柄であった。このヴァレザーは渡辺滞独中にケールの中学教頭からハイデルベルク大学教授に栄転した。

渡辺帰国後、友松円諦に留学の話がもちあがると、渡辺はさっそくヴァレザーを紹介した。友松（一八九五—一九七三）は、一九三二年（昭和二年）、マックス・ヴァレザー（一八七四—一九五四）のいるドイツ・ハイデルベルクに出発した。

ハイデルベルク

わが国近代においてドイツの大学、とりわけプロイセンの首都ベルリン、ハノーヴァー王家支配下のゲッティンゲン、バイエルン王国のミュンヘン、それにハイデルベルクには多くの日本人が留学していた。

ハイデルベルクはネッカー河畔に位置し、古城があり、川沿いに「哲学者の道」と名づけられた散策コースのある美しい街。ウィルヘルム・マイヤー・フェルスターが一九〇一年に王子ハインリッヒと喫茶店の娘ケーテとの恋を描いた『アル

ト・ハイデルベルク』に、

遠き国よりはるばると

ネカーの河のなつかしき

岸に來ませるわが君に

今ぞささげんこの春の

いと美わしき花かざり

いざや入りませわが家に

さわれ去ります日もあらば

しのびたまわれ若き日の

ハイデルベルクの学びやの

幸おおき日の思い出を (番匠谷英一訳)

と歌われ、旧制高校生にはとりわけよく知られた大学町であつたという。ハイデルベルク大学はドイツ最古の設立でもある。この大学のインド学で学んだ日本人は友松が最初であつたであらう。

マックス・ヴァレザー

ヴァレザーは一八九一年から一八九六年にかけてハイデルベルク、フライブルク、スイスのゲン

フで学んだ。ロイマンに学んだ藤田真道によると、

時に天下の英才雲集して先生の門を叩いた。

ジャイナ学を嗣ぐものにはハムブルグ大学の

Schubring 教授あり、仏教学では夙に我国

に有名なるハイデルベルグ大学の Max

Waller 教授も先生の弟子であつた (略)。

「恩師ロイマン教授」

と、ヴァレザーはロイマンの弟子筋という。ただ年代的には萩原、渡辺の滞独以前に學業を終えているから、蛭雪時代はこの兩人と同じではない。

渡辺が伝えるところでは、

此人は夫の大哲学史家クノー・フィッシャーの高弟で哲学者としても相応の地位を占め得る力量があるが、『自我の問題』の大論文で大学を出でて後、仏教の研究に志し、梵語の傍ら西蔵語に通じ且つ漢訳をも読み得る技倆を具へ、新進学者として雄然世界を睥睨しつつある (『欧米の仏教』一〇五—一〇六頁)。

という。このクノー・フィッシャーの影響を大

く受けた日本の宗教哲学者に波多野精一がいる。ただ氏はハイデルベルクに留学したが、実際にフィッシャーに師事したかは記録類がないので不明といわれる。ヴァレザーはとりわけ大乘仏教を専門とし、ともかくこの分野ではドイツで第一人者であった。

ヴァレザーと友松の対面

師ヴァレザーとの初対面の日について友松はどのように報告する。

昭和二年十二月七日 朝食後、若山君きたる。KOにいたことがあっていい男だ。伴われて相馬と三人にてワレザー先生にゆく。午後三時十五分の茶に招かる。夫人の配慮にて、となり宿がきまる。六十五マルクなり。到着電報を打つ。(略) 三時半に一人にて先生のところへゆく。先生の一子、フリッツ手伝い連れて荷物をとく。

宿の住所は次のとおり。

10. Goethe Strasse, Heidelberg, Deutschland

この時、ヴァレザーは五十三歳で妻子がいた。渡辺海旭によると、留学当時親しく接していたころ、ヴァレザーも渡辺同様、「無妻主義」で意気投合したと伝えている。しかしながらその後ヴァレザーは結婚したのである。フリッツと名乗る男の子と娘がいた(後年渡辺はそのことを伝聞したであろうが、これについては何もふれていない)。

初対面の翌日、なにしろ宿はヴァレザー宅の隣で、荷物も先生気付けであった。

十二月八日 朝おきたら十時だ。三つの残っている鞆をあげる。本が沢山出た。やっぱり本が慰めだ。力だよ。午後ワレザー先生のところへゆく。お茶をいただいてから、先生とフリッツと娘さんと四人にて「古城」へゆく。とてもいい感じだ。

渡辺は留学当時のヴァレザーについて、「花の屋」といふホテルに呑気に城を構ふえ

込むで、「君此所等の教員連とくると、研究なんてことの解る奴は一匹も居ない。豚肉が上ったとか、馬鈴薯がよく出来たとか、家鴨の卵がどうだとか、丸で土百姓同然だ。情ない奴等さ」まあ、彼の気焰はこんなものだ（『壺月全集』、下四六二頁）。

といい、当時、ハイデルベルク大学の教員達に對してヴァレザーが皮肉ったことを伝えている。

他方、友松の伝えるヴァレザーの印象は、「つり上がった眉毛」（小伝七〇頁）とした上で、

あの太った、大きな体を不器用に運んで入ってこられた。ふるくさいモウニングをきこんで、この世紀にはつかはないやうなカラをはめてまごまご入ってこられた。そのとき位、先生の特徴をはっきりうけたことはその後一度もない（小伝六八頁）。

という。あるいは性格について、

超然として自分一人清いやうな顔もしていられない。たしかに濁った顔と濁った声の持主

である。先生には禅味が多分にある。といつてきどったところがあるのではない。わるく言へば世渡りの下手な、融通のきかぬ極く一本調子の性格の持主である。さう申してはお叱りをうけるかもしれないが、私は恩師常盤大定先生に似たところがあるやうに思はれてならぬ。（小伝六八頁）。

と、「禅味」があるとし、この点から「東洋風の学者」と解している。

随分、頑固なところがある。几帳面で、独逸流の合理主義でやつつけるので、周囲の者もみな困らせられることもあるらしい。先生の趣味は生活全般の上にひろがっていない。室をみても書齋をみても、歩き方、話し方をみても、どこにも「風雅」などところはない。独逸の仙人はどうもかたくなのところが多くて、やさしさ、風韻といふものがないやうに思はれる（小伝六九頁）。

先生は時々私の室をたたかれる。あの濁った

声を戸口にきくと、さては先生だと思ふ。

用事だけはなすとすぐかえられる。用事以外には話のない先生である。私のうちばかりでなく、門下の家でもどしどし用事があればゆかれる。「用事はないが一寸立ち寄った」などとうやうな風雅な心持は先生にはない。至ってあわて者である。親切なあわて者である。かうした妙な、あはたらしい性格は、欧州大戦に出征されて頭部をけがされたからであるらしい（小伝六九頁）。

だいたい「親切な先生」とあるし、「門下の研究上の仕事についても先生は極めて親切であり、世話好きである」という。

ヴァレザーの趣味

友松はヴァレザーを趣味の人とし、

随分沢山かかれたらしい先生の風景画などをみたが仲仲堂に入ったものである。

先生のヴァイオリンはかなりに年季があるよ

うである。一週に一回は三、四人集ってピアノと合奏をされる。（略）ただ、一周一回のその晩には往來の窓下にいつも四、五人の人々が立ちどまってきいているところから察して、たしかにきくに価しているらしい。

という。ただ友松からみると、それも仙人のような生活という。

十何年も大学に教鞭をとっていられるにかかはらず、一向その位置もあがらず、ふるい友達にきいてみると大学からうけとられる俸給なんかは殆んどないも同様ださうである。ただ、多少の遺産と、中学校の仏蘭西語やラテン語の教師をされていたための恩給とでやっていられるらしい。（略）何れにもせよ、先生の現在の仏教学の研究、並びにその講義著作では損をこそすれ、何らの収得にならぬらしいほど先生は世渡りが下手である。勿論、かうしたところで仏教学なんかでやまをあてやうなんて考へるものは一人もないにきまつ

ているが、然し世渡りの巧拙はその人に大部分あるらしい。かうした先生の仙人のやうな生活態度から考へて、先生が極めて趣味に豊かな人であることは面白い対照である。従つて先生の家庭にはいくらかふうくらしした気持ち流れている（小伝六八―六九頁）。

友松は慶応大学では経済学を修めた人であるから、経済的な面でヴァレザーが何にも拘泥しないそぶりから「仙人」とみたふしがある。

友松の学業

友松は日記を残しているが、これが簡単なメモ程度であり、概略しかわからない。

ヴァレザーから学んだものは、サンスクリット、パーリ語が主であつたらしい。具体的にはパーリの『中部』經典、「マハーパリニツバンナ・スッタナ」が出てくる。そのほか『リグ・ヴェーダ』『俱舍論』の名もみえる。

そのほかツインクグレーフ（Willi Zinkgräf

はドイツ人であらうが、生存年代は不明）と二人で一定期間、毎日のようにテキストを読んでいる。友松によれば、それらは「天業譬喩經」、Sudhānakumāra, Rūpyavatī, あるいは Supriya, Sudaka とある。

ツインクグレーフは友松が去つた一九四〇年、次の書をハイデルベルクから出版した。

Von Divyāvadāna zur Avadāna-Kalpalatā:
Ein Beitrag zur Geschichte eines Avadāna.

（日本名で『デイヴヤアヴァダーナからアヴァダーナシャタカまで（アヴァダーナの歴史への貢献）』。これはインドのさまざまな仏教説話を採録したもので、本書の内容は第一部、デイヴヤアヴァダーナ、シャルヅーラカルナ・アヴァダーナ、第二部、アショーカー・アヴァダーナ・マールラーのパドマ・アヴァダーナ、アヴァダーナ・カルパラターのパドマカ・アヴァダーナから成る一二七頁のもの。

本書の序文によると、『デイヴィヤアヴァダー

ナ』所引の説話については対応する漢訳『根本説一切有部毘奈耶』がある。ヴァレザーは漢文も読めたというが、おそらくそれを友松と一緒に読んだと思われる。

ロイマンの講義に出席

渡辺や荻原の師であったロイマンは第一次世界大戦の戦禍を逃れて、一九一九年、長年過ごしたシュトラースブルクからフライブルクに移り、フライブルク大学で教鞭をとっていた。ロイマンに師事した日本人は多いが荻原、渡辺以外は、みなフライブルク時代に学んでいる。

友松も一九二七年（昭和二年）、フライブルクへの旅行中、ロイマンの授業に出席したことを次のようにいう。

三月三十日（土）

午前十二時〜一時 ロイマンの講義。昼食は藤田、徳永、川瀬先生と四人。夕方迄散歩す。夜は活動写真、それから歴史的方法と材料に

ついて議論する。三時半眠る。

ロイマンは、ときに六十八歳。その時同席した藤田真道、徳永茅生、川瀬光順らと昼食をともにした。フライブルク旅行中の友松の様子について徳永茅生はこう記している。

汽車で二、三時間北へ支線で少々はいったネッカー河畔にあるハイデルベルク、ここも大都市で日本人留学生の伝統的に多いところである。（略）そのハイデルから訪ねて来られた三人の日本人留学生を、ある日A氏が私の宿へ案内された。一人は仏教学者T氏、後に法句経の放送で有名になった人、『袖ふれあうも』一一七頁）

徳永はその三年後一九三〇年にフライブルクからハイデルベルクを旅行するが（同書、一四六頁）、友松は一年前にハイデルベルクからパリに去った後であった。

なおフランスで友松はシルヴァン・レビイに師

事した。そこで出席した授業は「一般東洋文化」、「亀茲語」「法句經」や唯識梵本」（「レヴィ先生のこと」）であった。友松はフランス語で『大莊嚴論經』とサンスクリット本との比較研究という大部な論文を発表している。この書のサンスクリット本はフランスのル・コックが中央アジアの亀茲で発見し、リュードースが校訂本を出版したものである。漢訳との対比研究についてはシルヴァン・レヴィが行ったが、その際おそらく友松が漢文の訳読に寄与したと思われる。

すでに友松はドイツでツインクグレーフと集中的にインド説話文献を読んでいたから、留学中はとりわけインド仏教の説話、史伝物語を中心に研究したことがうかがえる。

（大正大学教授）